

東北ヘルプ ニュースレター

2025 年 クリスマス号

「ネット」を「ワーク」させる 1～2 頁

壁画と版画と物語 3～8 頁

子どもたちに「今 起きていること」を 9～14 頁

「宗川さんの意見」への、加藤さんの意見 15 頁

会計報告・献金者御芳名録(感謝) 16～18 頁



「ネット」を「ワーク」させる

被災支援ネットワーク・東北ヘルプが、今、していること

理事会で、あるご意見が紹介されました。それは、このニュースレターを読んでもくださる方からのものでした。「ニュースレターは詳細で、大変勉強になる。『3.11 の被災地』がよく分かって有難い。けれど『東北ヘルプ』は、今、一言で言って、何をしているのか、簡潔にわかるとありがたい」——と、とても有難いご意見でした。

以下に「東北ヘルプが、今、していること」を、簡潔に記してみます。

2025 年 11 月 18 日 東北ヘルプ代表 川上直哉

2011 年 3 月 18 日以来、「東北ヘルプ」は

「支援者を支援する」

ということを、自らのミッションとしてきました。

2015 年頃からはっきりと、その働きは

「風化に抗う」

ということを、最大の課題としてきました。

2020 年頃から徐々に、その課題の為には

「植民地主義を見据える」

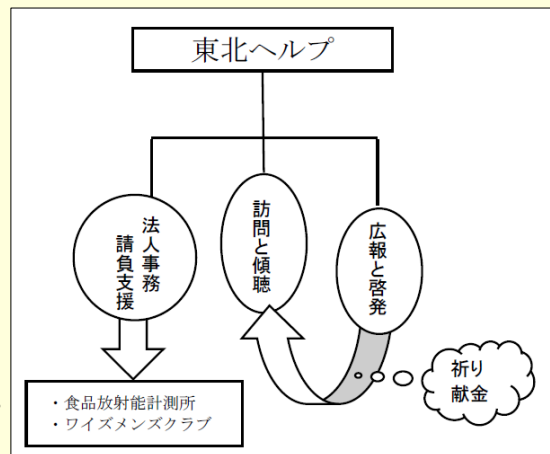
ということが鍵になると考えるようになりました。

被災地の現場では「支援者」が輝くような働きをしています。それは神さまからの賜物と思われました。私たちはキリスト教団体ですから「神様の御業のお手伝いをする」と考えます。それで、私たちは最初から「支援者を支援しよう」と考えました。

「3.11」の衝撃は大きなものでした。ですから、却ってきっと、その風化の勢いも大きくなると思われました。あるいは「風化」も、大切なことかもしれません。でも、そのことに つらい切なさを感じる人々がいる。それで、私たちは「東北の被災地」と全国・全世界を繋ぐ努力をするように、意識を集中させています。「東北キリシタンツアー」等による交流人口の維持発展、あるいは発刊するニュースレターの充実等、努力は続いています。

そうした中で、「復興」という言葉の欺瞞や嘘あるいは空虚さが、私たちの心に重くのしかかるようになりました。とりわけ「フクシマ」（福島県を含む、東京電力株式会社の「福島第一原発」事故の放射能被害現場）の課題を前に、そのことは強烈に感じられるようになりました。東北の歴史を学ぶ中で「今と同じ明日でなければ困る」という思いが、社会の権力構造の上部で固持され、権力の下にある現場に押し付けられる——そうしたことを「植民地主義」というのだと、知りました。この「植民地主義」は、一朝一夕の事柄ではない。歴史の重みを持っている。まず、その重みを理解して取り組まなければならない。

以上のように考え、私たちは現場に立ちつくし、また、理事会を開いて現場の報告を交換し、祈りを合わせて進んでいます。私たちの今の体制を図にすると、右のようになります。



- ・真ん中に「訪問と傾聴」があります。現場に出て行くことです。そこで出会う支援者を、支援する。それが基本です。

- ・現場で知ったことを全国・全世界に伝えます。ニュースレターや講演、シンポジウムなどが主な手段になります。そして思いを集め、祈りを呼びかけ、献金を預かる。その思いと献金を、祈りに押し出されて、現場へとお持ちする。改めて現場を訪問し、傾聴する。そうしたサイクルを生み出して行きます。

- ・「東北ヘルプ」はNPO 法人です。現場と、現場への思いを、世間の仕組みの中に納める機構を持っています。たとえば、「フクシマの現場への思い」は放射能計測所を産み出しました。それは具体的な場所と機械を用いる事柄です。それで、「法人」が役に立ちます。さらに今、「ふくしまYMCA」を立ち上げようとする有志の方々（ウィズメンズクラブの皆様）がおられますから、その事務の一部を担っています。その時、計測所で学ぶ事柄は、そのまま 活き活きと 役に立つ、ということになります。

「ネットをワークする」という言葉があります。世界宗教者平和会議日本委員会、そしてエキュメニカル・ネットワーク・ジャパンで親しくご指導くださった前島宗甫先生が好んでお使いになった言葉です。

私たち（被災支援ネットワーク・東北ヘルプ）の働きは、まさに「ネットをワークする」試みの連鎖となっているように思われます。

今、津波の被災地では、人手不足が深刻です。手をこまねていたら、津波被災から復旧した水産加工工場等が連鎖倒産する。それほどに、人手不足は深刻なのです。それで、「移民労働者」を巡る社会の準備不足とそれを覆い隠す欺瞞を十分に承知しながら（むしろ、その不足と欺瞞のしりぬぐいを押し付けられながら）津波被災地は若い**外国人移住者**を「感謝して」受け入れなければならない。実際、それは難しいことです。「はじめてイスラム教徒を見た」という方が、現場にはたくさんおられる。そこには「いのち」にかかわる問題（若者の妊娠・中絶等から高齢者の埋葬まで）がある。今、「土葬」という言葉を用いたデマに煽られて、排外主義が盛り上がっています。「3.11」の時、私たちは「外国人被災者支援プロジェクト」を担ったのです。また「弔い」を核とする諸宗教協働の「心の相談室」も立ち上げました。その経験は、きっと、今、生きる。私たちにも、できる事がある、と、そう思います。

あるいは、400 年前に徳川・伊達が共同で派遣した「慶長遣欧使節」を土台に、津波被災地が音楽とスポーツを核として世界の各都市と繋がりあう「**支倉都市同盟**」の構想があります。少子高齢過疎の行き止まりに直面していた「2011 年」の状態に“復旧”させるだけでなく、また、「どこかの誰か」が机上で書き上げた“復興”に唯々諾々と従うのでもない。自分たちの「新しい何か」を被災地から立ち上げる。そのために「東北キリシタンツアー」の知見も、役立てて行く——そのようなことを、私たちはしているように思います。

壁画と版画と物語

近藤風人さん という大学生が「**フクシマのある国で**」という「感話」を記してくださいました。それは、とても重い・大切な言葉でした。私は自分の Facebook に、以下のように記しました：

「被害者の皆さんには、被害のリスクをどう引き受けていただくかが重要になります。従いまして、加害者としては、しっかり説明して行きたいと思います」

…と、東京電力株式会社の職員に、目の前で、はっきり語られた大学生。

この大学生は、福島県内で生まれ育ち、故郷を奪われた体験を抱えて生きていた。

「この時、生まれて初めて、人を憎むということを知りました。」

と、この大学生は語ります。そんな「感話」が届きました。重く受け止めて、お分かちしたいと思いました。

近藤さんの「感話」は、雑誌『共助』2025年7号に掲載されています。



「感話」全文はキリスト教共助会ホームページで全文が閲覧できます。

ある方が、この私の Facebook の投稿に応答して、「なぜ人は歴史的過ちを、半ば犯意を持ってわざわざ繰り返すのか。なぜ、もんじゅや JCO の件で引き返すとか、見直すことができなかったか。そもそも被害者の存在を（確率論的にも）前提として、しかし金の補償も少なく、謝りもしない団体とは、何なのか。」——と、記して下さいました。

そうです。「なぜ？」と、私たちは、ずっと、問い続けています。そしてこの秋、その答えの手がかりのようなものを、私は津波被災地で、版画と壁画に、見た気がします。そこから足許を見つめた時、この「東北」の歴史の中で「どうすればよいか」の糸口を、見つけたような気がしています。そのことを、以下に記します。

(2025 年 11 月 15 日 川上直哉 記)

2025 年 11 月 3 日の良く晴れた秋の日、私は、石巻市の沿岸部を訪ねました。日本基督教団仙台東教会に赴任して来てまだ半年、という佐々木玲哉先生をご案内するためでした。佐々木先生はまだ 20 代という若さ、ずっと西日本にお住まいで、東北の震災については「あまり具体的にはわからない」とおっしゃいます。「それでは」と、今の被災地をご案内したことでした。

私たちは石巻の市街地で合流し、海岸線を北上して「雄勝町」へドライブしたのです。震災前に「4,000 人」ほどの人口であった雄勝町は、津波によって甚大な被害を受けました。死者・行方不明者は「236 名」となりました。そして、人口は「1,000 人」ほど、となりました。命が助かった人々が、本当にたくさん、「復興」の工事を終えた後、故郷を離れていました。

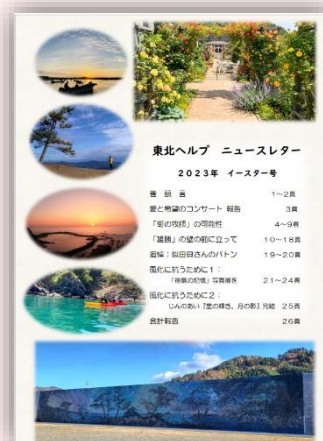


人口4300人⇒1089人
中心部1600人⇒173人

【大多数の住民】
雄勝以外の地に自宅再建
雄勝以外の地に集団移転

↓
人口の激減

そこには「被災の当事者が、復興の当事者になっていない」という深刻な現実がありました。私たちはそのことを雄勝の皆様に教えていただき、2023 年に発刊した「ニュースレター・イースター号」に記しました。「15m」を超える津波に襲われた地域に「10m 未満」の巨大堤防を、延々、建設し、その管理維持費は地元が負担することになる。地元住民は反対したが、まったく聞き入れられず、工事はひたすら進行し、竣工した・・・という現実が、そこにあったのです。



私たちは昼食を「てらっばだけ」というお蕎麦屋さんで頂きました。漫画『みちのくに みちつくる』で、復旧工事の激しい中でお店を出してくださった様子が紹介されている、大切なお蕎麦屋さんでした。



美味しい「新そば」を頂いた後、外に出て雄勝湾の対岸に目を向けてみますと、少し様子が変わったことが見えてきます。“どこかの誰か”が主導して計画したこの「復興の防潮堤」に、この地の人々は反対し、しかし押し切られてしまった。しかし、なお、この地には、踏みとどまった方々がいました。その人々の中から、あるアイデアが生まれました。

クラウドファンディングをし、その「巨大な壁」に大きな絵画を描き、「海の美術館」を作ってしまう。そう志し、動き始めていました。そのことを、私たちは2023年の春に、知らされていました。そして今年・2025年の11月、その巨大壁画は、次第に充実してきたことを、私たちは知らされたのでした。新しい作品が続々完成し、その説明板も設置されつつある。そのことに驚きながら、私たちは「雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデン」へ向かいました。



雄勝ローズ・ファクトリー・ガーデンで、私たちは、貴重なものを拝見しました。それは2012年に石巻市立雄勝小学校5年生9名が作成した版画「希望の船」でした（3ページに縦に挿入されている写真をご覧ください）。「雄勝小学校」については、以下のように報告されています。

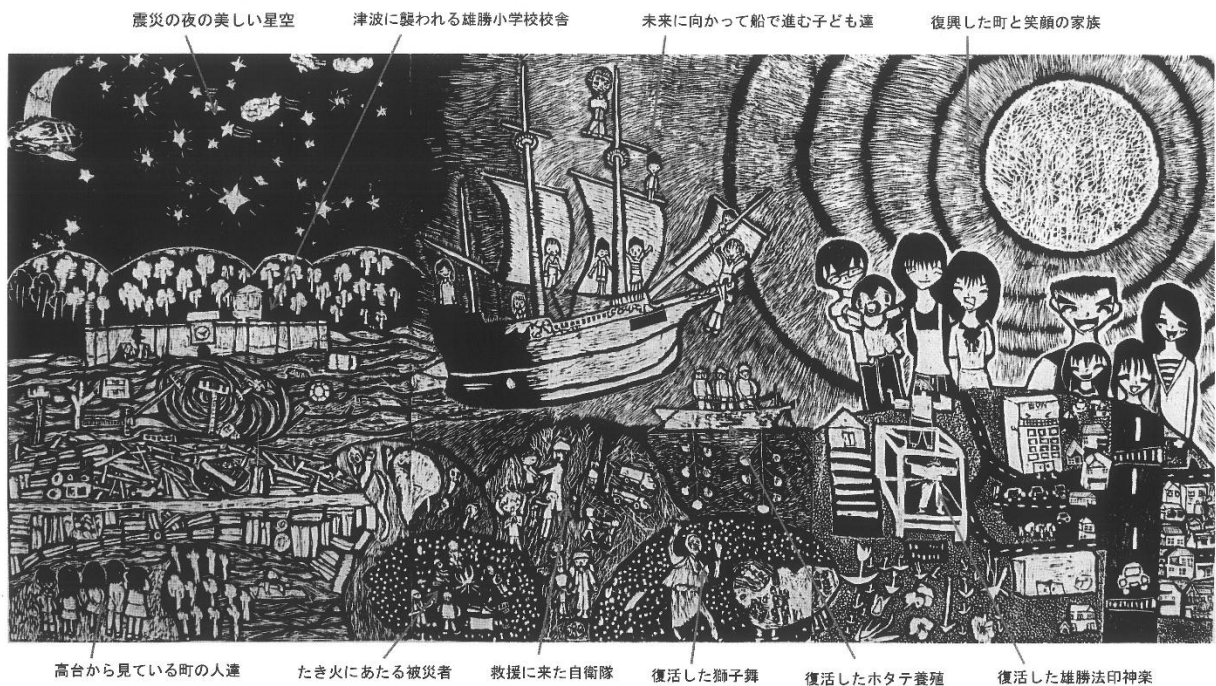
「3.11」によって亡くなった児童は1名（下校していた児童）、父親を亡くした児童1名、祖父母を亡くした児童5名であり、108名の児童のうち、3名を除いて自宅が全壊。教職員16名中、家族を亡くした者2名、自宅全壊3名であった。

佐藤修司「東日本大震災後における復興教育実践に関する考察—宮城における徳水博志の教育実践を中心に—」

『秋田大学教育文化学部研究紀要』78号、2023年、35～42頁

この版画作品の制作を指導された徳水博志さんは、この作品について、私たちに以下のように説明してくださいました。

被災した子どもたちが創った版画 題名「希望の船」



2012年度 石巻市立雄勝小学校5年生制作 指導 徳水博志

この絵画には、子どもたちの「復興」が描かれています。そして、徳水さんをはじめとするこの地の大人たちは、この子どもたちの声に、真剣に耳を傾けました。そして生まれたのが、「雄勝ガーデンパーク構想」という復興ビジョンでした。



左は、雄勝ガーデンパーク構想の全体像（インターネットで「雄勝ガーデンパーク構想」と検索下されば、詳しく見るができます）。

右は、その構想が進展したことを伝える2025年11月13日付の新聞の一面。



帰宅して、ふと考えます。「津波と原発事故の被災地」の今を重ねて、考えます。

結局、「被災の当事者」が「復興の当事者」とならないことが、問題の核心になっている……

——この事は、この秋・10月10日に仙台で行われた「日本倫理学会」に私もシンポジストとして登壇させていただき、学者さんたちと語り合うなかで、強く思い出させられたことです（とりわけ、山内明美さんの『痛みのかゝる東北論』青土社、2024年に、刺激され考えさせられました）。

どうしたら、「被災の当事者」が「復興の当事者」となることが、できるのだろうか……

そうして考えは進みます。ここでいう「復興の当事者」とは、誰でしょうか。たぶんそれは「東京の霞が関あたりの人々」ということになりそうです。そして「復興の当事者となれない被災の当事者」とは、誰でしょうか。それはたぶん、「将来の世代の人々」となりそうです。

「今だけ・カネだけ・自分だけ」という言葉が、なんとなく、思い出されます。この内の「今だけ」が、どうも、問題になりそうです。大きな壁画の数々も、そして小学5年生の版画も、それを描く「今」ではなく、それが目指す「将来」を、念頭に置いている。でも、巨大堤防や原発などの公共工事は、どこまでも「今」の精いっぱい経済効率ばかりを考えて、組み立てられている。そのことに気づきますと、

どうしたら、「今」の精いっぱいから、私たちが解放されるのだろうか……

と、話は少し、深い所へ進む気がします。

* * *

この秋も、私は韓国からのお客様を、何度も被災地にご案内しました。私はいつも、

- ・かつてあった朝鮮総督府の「モデル」は、「戊辰戦争に完敗した後の仙台」であった事。
- ・戊辰戦争後の仙台を植民地とした明治朝政府は「太政官制度」を復活させようとした事。
- ・太政官制度は、1300年ほど昔、大和朝廷が東北を植民地とするのと同時期に成立した事。

——を、韓国のお客様に、お話します。「大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に、私は一つ、うらやましいと思うことがあります。それは、植民地とされた苦しみの中から立ち上がり、独立された、ということです」と、いつも、たとえば青葉城址の入口の巨大な鳥居（のようなもの）を前に、私は東北を解説するのです。

1300年前、この東北は、数十年間の戦争を経て、西国の植民地となりました。攻めてきたのは「近畿の大和あたりの朝廷」の人々でした。私は「その人たちが悪人だったのではない」と思います。ただ、「今」の精いっぱいの結果、やむなく、侵略してきた。そして戦争になり、東北は敗戦した——さて、その後のことを考えます。それは、よく考えると、ぞっとするほど、

東北の現代日本と似ています。つまり「植民地戦争」の後の復興 と「3.11」の後の復興は、同じ面
面で、そっくりだ、と思うのです。それを一言でまとめて言えば、おそらく、こうなります。

●古代の「大和の朝廷」は、東北に巨大な収穫量が見込める水田耕作を広め、
「これで豊かになる」と教えた。実際に、豊かになった。
でも、そうして、東北は先祖を切り捨て、過去の伝統文化を放棄した。

●現代の「東京の霞が関」は、東北に公共事業（原発や巨大堤防）の大規模な再建を押し進め、
「これで豊かになる」と教えた。実際に（「今」確かに）豊かになった。
でも、そうして、東北は子どもたちを切り捨て、将来への展望を剥奪した。

* * *

なぜ人は歴史的過ちを、半ば犯意を持ってわざわざ繰り返すのか。

と、私たちは問を抱え、「3.11」以後の津波被災地を見て、壁画と版画に教えられ、

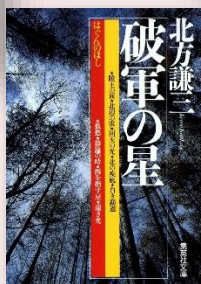
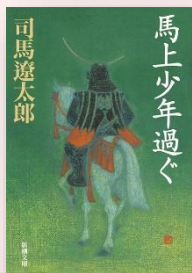
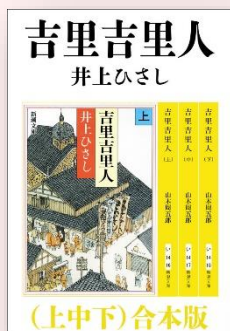
どうしたら、「今」の精いっぱいから、私たちが解放されるのだろうか…

と、問を深めました。今、ゆっくり考えてみて、これらの問は「東北 1300 年間の苦闘」そのもの
のだと、気が付いたように思います。

そうすると、一つの手がかりが得られるようにも思えるのです。

1200 年前の「阿弭流為（アテルイ）」・1000 年前の「安部貞任」・800 年前の「藤原泰衡」・
600 年前の「北畠顕家」・400 年前の「伊達政宗」・そして 50 年前の「吉里吉里人」・・・

以上は、「東北 1300 年間の苦闘」を背景とした物語に描かれた人々です。1300 年前からの桎梏
（くびき）に、どう立ち向かうのか。時代状況を異にして、たくさんの可能性が物語られてきた
ことに、気づきます。そうした物語を、読み直してみよう。そして、勇気を掘り出しながら、
私も「1300 年の課題」と、自分なりに向き合ってみよう——そう考えた、この秋でした。



子どもたちに「今起こっていること」を

「コミュタン」と呼ばれる教育施設が、福島県の三春町にあります。たくさんの子どもたちが、そこで「放射能」のことを学ぶ、そうした施設です。2016 年 7 月にオープンしました。全体の総工費約 100 億円、その運営費は年間 9 億円とのことです。



この三春町に、写真家の飛田晋秀さんが住んでおられます。震災の時・原発が爆発した時も、ここにお住まいでした。そして、2025 年の今に至るまでずっと、原発事故によって強制避難となった地域に足を運び、現地の写真を撮り続けているのが、飛田晋秀さんです。

飛田さんは、近所にできた「コミュタン」について、とても憂鬱そうにお話になります。

そこで展示していることは、“自然放射能”のことばかり。その職員も、原発事故由来の放射性物質のことは「知らない」と、はっきり、言う。それで、しばらく詳しい話をしてみると、その職員さんも「これでいいのだろうか」と、本音を語られる。「ここで働く“職員”という立場を離れて、この地に住む“親”としては、私も不安に思っている・・・」と吐露される。

環境省の参事官だった人が、東北に出向して来て、今、高校を中心に「放射能」の授業をしている。そこで「放射能は安全だ」という話が広がって行く。私はそのことに、危機感を感じているのだ。

飛田さんは、一念発起されます。「原発事故の強制避難地」をずっと見て来た自分が、子どもたちに、語らなければならないのではないかと——そして、飛田さんは、2018 年に献金の受け口を作り、福島県内に仲間を募り、学校で講演ができるように準備を始めました。

いよいよ、その準備が整いつつあるそうです。東北ヘルプ理事の木田牧師と私は、この夏の終わりに（いつまでも暑い今年でした！）飛田さんに、お話を伺ったのです。

——中学・高校を主な対象に。小学生には、35 分で。



という飛田さんの構想を伺い、私たちは、「小学生向け 35 分」の内容を、文字に残してみたいと思いました。飛田さんは、快く了解くださいました。以下に、ご紹介いたします。

(2025 年 11 月 12 日 川上直哉 記)

【自己紹介。明るく、元気な挨拶といっしょに】

みなさん、こんにちは。私は飛田晋秀（ひだ・しんしゅう）といいます。福島県の三春町から来ました。お城があった町です。ざる、鍋、包丁、和菓子、などなど、色々なものをつくる人が多い街でした。「なんでもそろう」町でした。

私は、そんな「物を作る人」を写真に撮る仕事をしていました。たとえば、こんな感じです。



初代が開業 1921 年(大正 10 年)三春町には十数軒あった桶屋も最後の 1 軒になってしまった。彼は第二次世界大戦の兵役から戻った 1954 年 9 月、家業を継いだ。素材にこだわり「クルミの木で味噌樽を作ると、その香りと甘みが味噌にしみこんで美味しくなるんです」と語り、なかなか手に入りにくい木を探し回っていた。

【家畜が野生化することから話を始める】

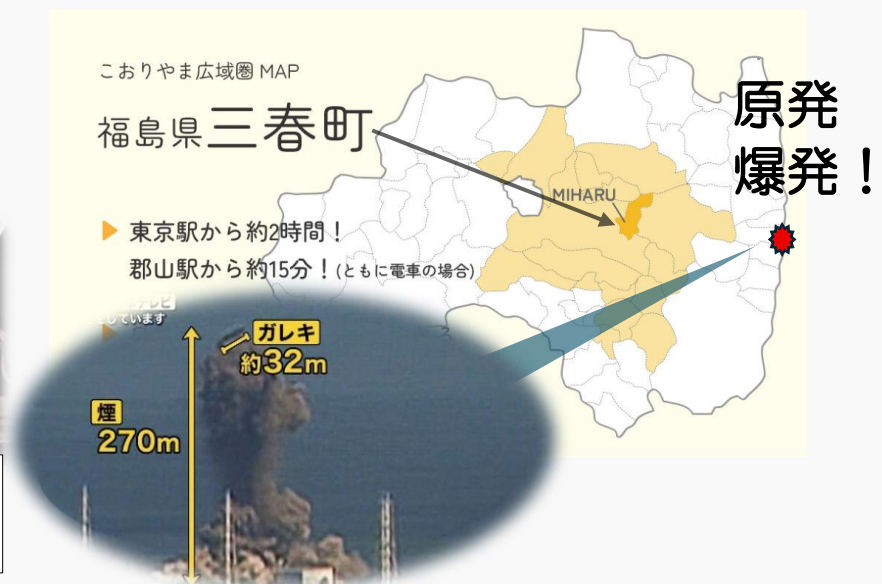
原発事故が起こった場所は、海のそばの、双葉郡という所です。

私が住んでいるのは、山の間にある三春町。地図を、お見せしますね（スライドを説明する）。

2011 年の 3 月 15 日まで、
爆発が続きました。海沿い
の人々は、みんな、逃げな
ければならなくなりました。



地震と津波と原発事故で
時間が止まった町の時計
2012 年 1 月に撮影



「誰もいない町」が残されました。人がいなくなって、ダチョウが町を歩くようになりました。その他、いろいろな動物たちが、人のいない町にたくさんいるようになりました。



牛も、町に出てきていました。お母さん牛は、子どもの牛を守るために、とても怖い顔をしています。近づいたら、襲ってきます。自動車でも、逃げられません。



事故から何年もたって、やっと、人間が町に戻ってきました。壊れた道路やお家を直さなければなりません。でも、そこに、たとえば、イノシシの親子がやってきます。とても、怖い。子どもを守ろうと、人間に襲いかかってきます。だから、イノシシが来たら、工事の人は、仕事を止めて、逃げることにしています。



【原発強制避難地に行くようになって】

たくさんの人が、大きな体育館などに、避難してきました。そのたくさんの人と、私は、お友だちになりました。

あるおじさんは、「自分の家や畑が、どうなっているか、心配だ」と言います。あるお婆さんは「家を新しく建てたばかりだったの」と言います。それで、私は「じゃあ、一緒に見に行きましょう」と言いました。そして、私はずっと、人がいなくなった町に入り、写真を撮り続けています。

はじめのころ、町は本当に「逃げた時のまま」でした。そのまま、何日も・何か月も・何年も、そのままでした。散らかったまま、時間が止まったままの建物の中を見て、「怖かったろうな」と、はっきり、感じました。
(スライドの説明をする)



富岡中学校の卒業式が終わった後、直ぐ、避難となった、その3年後の様子。まるで「昨日の事故」のような現場。

「タイベックス」とう特別な服を着て、危ないかどうかを確認しながら、自分の家に行くのです。でも長くはいられません。「危ない」からです。しばらくすると、呼び出しがかかります。



これは、
建てて半年のおうちです。
「危ない」ので戻れません。
しょうがないので、
新しいおうちを、また
もうひとつ、別に
建てることになりました。



【放射能の話】

「危ない」とは、どういうことなのでしょう？何が、あぶないのでしょうか？

実は、大人たちも、はっきり、それが言えません。でも、危ない。機械で計る数字が、その「危なさ」を教えてください。たとえば、人のいない町に、こんな紙が貼ってありました。

平成 24 年 3 月 18 日
原子力災害現地対策本部

原子力災害現地対策本部として下記をお伝えいたします。
大切な個人情報ですので、各自でお持ち帰りください。

記

1. 今回の一時立入りにより受けた放射線量は、(46)
マイクロシーベルトであること。

(線量計番号: 200)

※御参考として、日常生活で受ける放射線量を裏面に掲載していますので御覧ください。

※この線量のデータは、一巡目の一時立入りのデータと併せて、福島県が実施する「県民健康管理調査」に使用する場合があります。個人が特定されるような形で公表されることはありません。

2. スクリーニングを実施した結果は、問題ないこと。

この紙の
ここを、見て下さい。

この数字が

0.3

くらいになったら、
危ないのです。

みんな、
逃げなければなりません。
原発が爆発した後、
その数字は、

46.0

になったのです。
とっても、危ない。

2012 年、クリーニング検査場で、46 マイクロ SV の被ばくをしたことを記した書類

そして、それから今日まで、15 年くらい、経ちました。
みんなで、とっても努力して、町を直していきました。



今、こうしてきれいな町が、少しずつ、戻ってきています。

みんな、頑張っています。黄色い旗がはためいて、
「新しく、人が来てください」と言っています。

でも、やっぱり、気をつけなければいけません。

森や林の中に入ると、

23. 1

という数字が出ました。

0. 3

という数字になったら、ほんとうは、
誰でも、そこから、逃げなければならないのです。



大人たちは、みんな、こまっています。どうしてよいか、本当に、わかりません。だから、なかなか、この「本当のこと」を、みなさんにお伝え出来ないうでいます。でも、大人たちは、みんな、本当に、がんばっています。でも、どうしてよいかわからなくて、なかなか、本当のことを、みんなに伝えることが出来ません。

だから、大人として、私はみなさんに、「ごめんなさい」と言います。ごめんなさい。どうしてよいか、わかりません。でも、みんなのためにも、頑張らなければなりません。それで、お願いします。どうか、みなさん、今起こっていることを、知ってください。そして、大人たちが頑張っていることを、知ってください。そして、みんなも、勉強をして、運動をして、よく食べて、よく眠って、元気に過ごして、りっぱな大人になって下さい。そして、私たちといっしょに、本当のことを知って、時間をかけて、私たちの町を、直して行きましょう。

今日は、お話を聞いてくれて、本当に、ありがとうございました。

「宗川さんの意見」への、加藤さんの意見

私たちは、ニュースレター「2024 年クリスマス号」に、「報告：『ソーカワ事件』を巡って——FCC 放射能問題学習会から、科学についての市民的責任へ」という記事を掲載しました。その記事は、加藤聡子さんをはじめとする方々の、宗川吉汪さんによる研究発表への厳しい批判を展開するご議論を報告するものでした。

そして私たちは、ニュースレター「2025 年夏号」に、「宗川さんの意見：『小児甲状腺がん』と『科学の解釈学』を巡って」を掲載しました。加藤さんたちのご議論を読んでくださった宗川さんが、私たちに連絡を下さって、そのご高見をご披露くださったのでした。

「真実は、いつも、灰色の中にある」と、私たちは原発事故被災地の現場で、何度も何度も、学び続けてきました。今回は、「小児甲状腺がん」の非常な多発という現実を前に、同じ学びを深めたことです。

「灰色」の中にある真実を探すなかで、私たちは初めて、謙虚になる。そうして初めて、声をどこまでも小さくされている方々・ひたすらに踏みつけにさ

れている方々の、その深い痛みを、寄り添う準備が整う。そうした準備が整わないまま現場に出ると、「支援のために被災者を利用する」という醜悪を、さらしてしまうことにも、なりかねない——実際、そうした倒錯した「支援」に触れ、「3.11」の現場で、私たちは何度も傷つけられた痛みを覚えています。

この夏、私たちは、また改めて、加藤聡子さんから、連絡を頂きました。「宗川さんの意見：『小児甲状腺がん』と『科学の解釈学』を巡って」が掲載されているニュースレター「2025 年夏号」を回収すべきだ、というご意見でした。それは、次のようなご要請でした。「記事に出てきます「加藤聡子」「加藤」の名を削除し、加藤は内容については全く関知しないことを次の号に正式に公表するとともに、配布された全員にお知らせください。」

私たちはこのご意見もまた、真摯に受け止めたいと願い、理事会を複数回、開催しました。感謝なことに、加藤さんは私たちとの間に丁寧な遣り取りを進めて下さいました。

以上を経まして、私たちは、

- 2025 年 8 月 20 日付で発信した「東北ヘルプ理事会」発の手紙
- 2025 年 9 月 13 日付の加藤聡子さん・林衛さんからのお手紙と、付帯論文
- 2025 年 9 月 27 日付で発信した「東北ヘルプ理事会」発の手紙
- 「NPO 法人被災支援ネットワーク・東北ヘルプの皆さまへお願い 加藤聡子」

を、ニュースレター「2025 年クリスマス号」をお読みのみなさまがご高覧になれますように手配する、ということといたしました。以下に、上記の資料をご高覧いただくための URL と QR コードをお示しいたします。

<https://firestorage.jp/download/c96ede294801dafbcb24929c20bbe4bcf8d726f6>

または

<https://x.gd/kzVVc>



「3.11」の現場は、いよいよ、「白黒つけがたい」現実の中にあります。私たちは、そのもどかしくも苦しい現場に立つ人々のためにできる事を、皆様といっしょに、探し続けたいと願います。その大切な一歩として、今回の議論・遣り取りもあったことを思います。関係するみなさまのご高配と寛容に、深甚の敬意を表するものです。

2025 年 11 月 18 日 東北ヘルプ理事会

会計報告・献金者御芳名録（感謝）

2025 年も、年末が見えてきました。会計報告をいたします。

「コロナ」騒動の中で、献金額が「減少」しましたが、献金件数は「ほぼ横ばい」となりました。そこに、東北を覚えて下さる皆様の替わらないお心を、はっきり感じ、強く励まされています。そして、今年は献金額も「復調」の兆しを示しています。

以下に、NPO 法人の理事会に報告するフォーマットでの会計報告と、献金者御芳名録を、心からの感謝を込めて、記します。

2025 年 11 月 13 日 NPO 法人東北ヘルプ 代表 川上直哉

2025年度				2024年度			
	献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	支出金額
4月概算	31	¥937,000	¥193,395	4月概算	40	¥433,250	¥692,012
5月概算	47	¥374,188	¥943,579	5月概算	16	¥200,692	¥298,225
6月概算	19	¥408,665	¥177,857	6月概算	27	¥653,788	¥329,629
7月概算	31	¥371,023	¥525,321	7月概算	15	¥276,000	¥203,570
8月概算	24	¥225,822	¥607,824	8月概算	16	¥165,310	¥270,436
9月概算	13	¥280,420	¥367,377	9月概算	6	¥121,000	¥317,287
10月概算	18	¥625,950	¥276,024	10月概算	53	¥504,558	¥537,153
11/13まで	6	¥201,200	¥640,249	11月概算	24	¥250,612	¥342,536
				12月概算	88	¥905,114	¥328,006
				1月概算	41	¥491,870	¥648,649
				2月概算	38	¥559,533	¥272,988
				3月概算	32	¥844,419	¥1,079,166
	189	¥3,424,268	¥3,731,626		396	¥5,406,146	¥5,319,657
前年同月比	96%	131%	125%	前年同月比	96%	98%	89%

進捗率				2025年11月13日現在の資産		
日数	収入	支出		通帳1	¥155,459	※これは ランドセル献金 ↓ 実際の所持金
62%	68%	75%		通帳2	¥320,102	
	(500万円の予算対比)			郵貯口座	¥12,958	
				振込口座	¥16,689	
				未払い金	¥0	
				合計	¥505,208	¥185,106

経常支出	4月	5月	6月	7月	8月	9月
移動と会議	¥389,745	¥247,180	¥209,897	¥209,897	¥235,105	¥335,911
書籍	¥50,148	¥0	¥6,005	¥6,005	¥0	¥0
事務費・通信費	¥25,029	¥26,059	¥52,631	¥52,631	¥65,245	¥36,919
小計	¥464,922	¥273,239	¥268,533	¥268,533	¥300,350	¥372,830
	10月	11月	12月	1月	2月	3月
移動と会議	¥203,488	¥170,760				
書籍						
事務費・通信費	¥70,446	¥58,089				
小計	¥273,934	¥228,849	¥0	¥0	¥0	¥0

経常支出は毎月25万円以内をめざす。

	献金金額	前年 同期比
19年度	8,615,373	
20年度	9,332,281	108%
21年度	7,207,253	77%
22年度	6,573,685	91%
23年度	5,540,876	84%
24年度	5,406,146	98%
	献金件数	前年 同期比
19年度	464	
20年度	477	103%
21年度	519	109%
22年度	487	94%
23年度	412	85%
24年度	396	96%

2024年8月12日～2025年9月12日の期間、下記の皆様から、
貴いご献金をお預かりしました。献金は、祈りそのものと、心得ています。
賜りましたご厚志に、深く感謝を覚え、以下に御芳名を記します。

記

大曲ルーテル同胞教会 井上修三 内丸教会信徒 中屋重正 日本基督教団新生金石教会
時宗不退山長徳寺 住職 渋谷真之 金野壮 間 真実 北海道キリスト教会 黒澤貞子
尾関敏明 熱田洋子 釧路キリスト福音館 支倉清 有限会社ワタヌキ・ときの忘れもの
日本基督教団下谷教会 代表役員 藤田義哉 日本キリスト教団 青戸教会 山岡みちよ
インマヌエル深川キリスト教会 川嶋直行 虹の橋募金 会計藤村真弓 瀬戸章子
青山学院女子短期大学同窓会 TAKAYAMA BEACH CO. 日本キリスト教団頌栄教会
日本キリスト教団 東京都民教会 東京カベナント教会 虎川清子 小川圭一 山口広
日本キリスト教会東京告白教会 教会学校 公益財団法人 日本 YMCA 同盟 牧甫
久遠基督教会 日本基督教団杉並教会 竹本栄子 松浦賢治 虎川清子 麦倉道子
巣鴨聖泉キリスト教会 末廣禎一郎 大日方由美 木村葉子 石井智恵美 金井美智子
国際基督教大学教会 塩田隆良 大谷尚子 水永晃子 (ICU 教会) 高桑雄一様・郁子
日本キリスト教会多摩地域教会 (府中中河原教会) 藤原俊樹 村田藤江 浜口紹子
日本同盟基督教団 恋が窪キリスト教会 基督聖協団八王子教会 月本昭男 高橋みどり
よろこび研究所 代表奥田英男 堀内洋子 松井弘子 細井孝江 横浜キリスト教会
日本キリスト教団横浜上原教会 入江修 塩田瑞代 宮澤玲子 宮澤玲子 (柏木教会)
田園江田教会 佐川英美 鈴木茂 鶴見教会 日本キリスト教会 横浜海岸教会
日本キリスト教団蒔田教会 日本キリスト教団 蒔田教会 岡本連三 西尾和加子
日本キリスト教会 横須賀教会 福井紀子 森和亮 沼崎真奈美 谷澤田鶴子 岡進
宮坂信章 日本基督教団西千葉教会 日本キリスト改革派稲毛海岸教会 大谷偕子
佐藤由紀夫 山中伸郎 青木一芳様・清子 日本基督教団市川三本松教会 倉石昇
アキヤマアキコ、ユタカ ハーベストチャペル実稲キリスト教会 山中伸郎 由良あゆみ
相場郁朗 川上政孝 長谷川光孝 新津テイ子 渡辺ミドリ 日本基督教団 取手伝道所
山口由紀子 宮崎昌久・せい子 日本キリスト教団四條町教会 山隅良平様・嘉代子
認定こども園西那須野幼稚園 山隅嘉代子 山隅良平 萩原恵子 井形英絵 五井純
杉澤卓巳 若月学 日本キリスト教会 日本キリスト改革派新座志木教会 有山敏
星野房子 日本キリスト教団東所沢教会 日本キリスト改革派新所沢教会 関口貴子
御園生好子 引間春一 日本キリスト教団甘楽教会 山田節子 遠藤正子 岩間孝吉
小原福治研究会事務局 仲田 日本キリスト教団軽井沢追分教会 フロイラン規子
日本キリスト教団松本教会 足立正範・実紀子 富士吉田キリストの教会 森重男
日本キリスト教団山梨教会 及川信 羽野浩雪・環 竹下博美 山本博愛・恭代
鈴木淳司 加藤啓子 小坂井勉 名古屋キリスト教社会館 理事長湧井規子 中島隆宏
名古屋岩の上教会 日本基督教団名古屋中央教会 原科浩 伊藤まり子 神田常美
日本キリスト教団天白教会 日本基督教団南山教会 國島孝子 渡辺真悟 山信彦

一般社団法人日本アルベルケ協会 吉田文夫 櫻井志穂子 上野緑ヶ丘教会 細川富代
羽賀美左乃 本村大輔 日本基督教団天満教会 小林和代 大宮まぶね保育園 酒匂友和
大阪栄光キリスト教会 大阪栄光キリスト教会 代表 土屋正幸 李相勲 橋本啓子
在日大韓基督教会 教会女性連合会 日本基督教団池田五月山教会 田村仁美
香里教会 今川泰彦 枚方くずは教会 日本自由メソジスト布施源氏ヶ丘教会
森島尚子 濱田美恵子 千葉一夫 前川裕 日本基督教団同志社教会 野牧一弘
日本基督教団室町教会 京都上賀茂教会 日本基督教団鴨東教会 宗川吉汪
在日大韓基督教会京都教会女性会 奈良いずみ 水本典子 春名克容 藤本りか
阿部克己 神戸聖愛教会 藤本新作 北神戸キリスト伝道所 光田隆代
小高美幸 宗教法人日本キリスト改革派板宿教会 荻原徹・邦子 岩間節子
日本キリスト教団 須磨教会 こども教会 日本基督教団西神戸教会 水野雄二
榎本聡子 上山尚美 社会福祉法人イエス団みどり野保育園 園長中田一夫
日本基督教団尼崎教会 吉田伸 日本基督教団西宮一麦教会 河内常男 瀬戸昭
日本基督教団はりま平安教会 三浦克文 宗教法人日本キリスト改革派岡山教会
岡田純爾 禎子平島 アイジエル広島福音教会 野村篤子 川本隆史 佐竹早苗
日本キリスト改革派東広島教会 宗教法人 高松シオン教会 日本キリスト改革派徳島教会
寺内利行 青柳芳明 柏原繁宣 門司大里教会 全国かくれキリシタン研究会 安東邦昭
柴田公文 金子純雄 濱地正枝 宮井武憲 日原広志 柚之原寛史 吉田正子 矢部邦子
改革派熊本教会 幕田君江 木田恵嗣 加藤富美子 白田正樹 金南植 加藤富美子
弁護士 太田伸二 小野寺順子 尚綱学院高等学校 加藤重雄・真子 宮本約 清水弘一
日本キリスト教団 仙台北教会 間庭妙子・洋 鈴木みね子 栗原健 福田一彦 松本芳哉
尚綱学院大学宗教部 木村すげみ 佐藤玲子 佐々木公明 辺見トモ子 千葉あつ子
日本バプテスト連盟南光台キリスト教会 日本キリスト教会仙台黒松教会 阿部紀美子
李貞妊 三條信幸 小杉澄子 本間英一 石井龍子 日本基督教団石巻栄光 川上直哉
石巻広域ワイズメンズクラブ 清水弘一 石井龍子 大林健太郎 徳水博志 中澤竜生
地域支援ネット架け橋 アメイジンググレイスネットワーク M 岸浪市夫 石丸靖子
丹田滋 須藤昇 古川幼稚園 南部正光 小林休 小川和孝 鈴木基行・真理 川上恵
遠藤茂雄 ワタナベケンスケ 石井龍子 ケンダンキョウカイ 横浜指路教会 学校法人
東北学院 岡崎茨坪伝道所 川崎松男 コジマヨシエ 由良あゆみ 猪刈由紀
日本キリスト改革派東広島伝道所女性会 匿名（多数）

（敬称略・順不同）

以上

編集後記：毎回、無事にニュースレターが発刊できことが、奇跡に思われます。実は、秋にもニュースレターを出したかったのですが、果たせませんでした。皆様のお祈りの支えを、毎回、確かに感じています。今回も、また、深く感謝を重ねている次第です。

12月29～31日に、中澤理事と、**能登**へ参ります。今回は「ワイズメンズクラブ」と「日本基督教団石巻栄光教会」との共同プロジェクトです。先に「被災者」の苦労を知らされた者として、何ができるのか、また、現場で学んできたいと思います。 （2025年11月18日川上 記）



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652